

芸術文化創造センター整備推進委員会 管理運営専門部会 第3回会議 議事録

日時：平成 25 年 10 月 21 日（火） 18:00～20:00

場所：市役所文化政策課 601 会議室

出席者

[委員]

| | 氏 名 | 選出区分 | 所属等 |
|----|-------|-------------------|---|
| 会長 | 桧森 隆一 | 文化政策 アートマネジメント | 嘉悦大学教授 / 地域産業文化研究所所長 |
| 委員 | 伊藤由貴子 | 劇場運営 音楽系 | 神奈川県立音楽堂館長 / 神奈川芸術文化財団 |
| 委員 | 井上 允 | 劇場運営 市民活動 | 元厚木市文化会館館長 |
| 委員 | 三ツ山一志 | 施設運営 展示系 | 横浜市民ギャラリー館長 横浜市民ギャラリーあざみ野館長 横浜市芸術文化振興財団 |

[事務局]

| 所 属 | 役 職 | 氏 名 |
|----------|-----------|--------|
| 文化部 | 文化部長 | 諸星 正美 |
| 文化部 | 文化部副部長 | 原田 泰隆 |
| 文化部管理監 | 文化部管理監 | 瀬戸 伸仁 |
| 文化部文化政策課 | 文化政策課長 | 中津川 英二 |
| 文化部文化政策課 | 文化芸術担当課長 | 間瀬 勝一 |
| 文化部文化政策課 | 文化政策課副課長 | 志村 康次 |
| 文化部文化政策課 | 芸術文化創造課長 | 高瀬 聖 |
| 文化部文化政策課 | 芸術文化創造係主任 | 松井 真理子 |
| 文化部文化政策課 | 芸術文化創造係主任 | 富士原 直也 |

[事務局補]

| 所 属 | 氏 名 |
|---------|-------|
| 空間創造研究所 | 橋爪 優子 |
| 空間創造研究所 | 瓜生 陽 |

[傍聴者]

5 名

次第

1. 開会

2. 議題

(1) 市民ワーキング報告について

(2) 芸術文化創造芸術文化創造センターの重点事業について

(3) 市民参加について

(4) その他

3. 閉会

1. 開会

事務局

ただ今より、芸術文化創造芸術文化創造センター整備推進委員会管理運営専門部会第3回会議を開催する。

(資料確認)

(部長挨拶)

以降の進行を委員長にお願いする。

2. 議題 (1) 市民ワーキング報告

桧森分科会長

事務局から、議題「(1) 市民ワーキング報告について」説明をお願いする。

事務局

(説明)

桧森分科会長

事務局から、議題「(2) 芸術文化創造芸術文化創造センターの重点事項について」説明をお願いする。

事務局

(説明)

桧森分科会長

議論の前に、「自主事業」などの用語はよく使われているが、業界用語なので解説をする。

芸術文化創造センターで行われる事業は、「自主事業」と「貸館事業」に分かれる。

「自主事業」は、芸術文化創造センターがリスクを負って主催する事業である。「貸館事業」は、芸術文化創造センターを借りた人が主催する事業である。両者の公演は一見同じに見えるが、全く違った事業が行われている。また、「貸館事業」にも、営利目的のコンサートなどの催しと、アマチュアが行う合唱団の公演やピアノ発表会、学校行事などの催しがある。

私は、「自主事業」について3種類に分類している。

一つ目は「買い公演」といい、プロモーターなどのプロが企画するものを、「1本いくら」のお金を払って公演してもらうもの。二つ目は、「オリジナル企画」として、自らプログラムを考えプロに依頼するもの。三つ目は、「制作事業」として、市民オペラや市民ミュージカルなど創りあげるもの。また、自主事業の中にも、「市民が企画して

作る自主事業」というものも含まれる。

それでは、第3回市民ワーキング管理運営部会の様子について、井上委員からお話いただきたい。

井上委員

第3回の市民ワーキングでは、東京オリンピックに絡めた企画を行う、お城の前という立地を活かし、レストランやカフェ、ミュージアムショップを造るなどの意見が出された。しかし、具体的に「芸術文化創造センターとして何をやっていくべきか」という突っ込んだアイディアはあまり出なかった。

私は、小田原の芸術文化創造センターは、神奈川県西湘地区の拠点となるべき施設であり、機関であると思う。そのためには様々なことが出来ねばならないし、上演していかなければならない。

しかし、客席が1,200席とすると採算のとれる公演はできない。例えば、有名歌手のコンサートを買うためには800~900万円程度かかる。チケット料金を8,000円とって満席にしても、公演代金がプラスマイナスゼロになるだけである。その他にも会場費、広告宣伝費や人件費が発生するので、利益を目的とするならば、有名歌手などの興行、公演・コンサートは行われぬ。

だが、「採算の取れない公演は行わなくてよい」という訳でなく、市民サービスの一環として行っていく必要がある。西湘地区の拠点として様々な催しをやる必要があり、その中で「小田原としての新しい総合舞台芸術」を創っていくことが芸術文化創造センターに課せられているものであり、やらねばならないことである。

市民の方々からはそういった意見が出されなかったのも、まだイメージがわいていないのかと思う。今後、「芸術文化創造センターで何をやっていくか」を明確にしていくことが必要だと感じた。

桧森分科会長

1,200席のホールでは、営利目的である有名歌手の公演は中々成り立たない。それでも聴きたいということであれば、自主事業の主催公演として行うことになる。満席になっても赤字になるが、それが芸術文化創造センターの事業費の中から出されていくということになる。そのようなことは、必ず起こることである。

事業というのは、黒字になり、建設費や人件費を賄うということはある。自主事業の中で唯一可能性があるのは、その公演にかかったコストを入場料収入等で黒字になるかどうかである。

井上委員

他にも、例えば東京にあるオケならば700~800万円程度かかる。それらは、お金が

かかるから小田原で演奏しなくていい、というわけではない。小田原でそのようなコンサートが行われる、という市民の期待にも応えねばならない。芸術文化創造センターで作品を創るのも大きな目標だが、まずはそれを意識しながら、今まで市民会館で上演できなかったものを取り入れ、市民の目を向けることも必要である。

桧森分科会長

自主事業は芸術文化創造センターの目的を達成するために行われるので、どの目的にあわせてどのような事業を選択するかが大切となる。

2. 議題 (2) 芸術文化創造芸術文化創造センターの重点事業について

桧森分科会長

本日は、第2回の設計案が配布されている。管理運営側からの、設計案に対するご意見を頂きたい。

伊藤委員

本日初めて第2回設計案を拝見した。

基本計画では、「大ホールの舞台の広さと、大ホール舞台面と同じ広さで練習ができる大スタジオ」となっているが、設計案ではそうになっていない。大ホールの舞台面と同じ広さが、大スタジオで確保できねば、基本計画の目標が達成できない。

また、小ホール舞台6間×5間でよいのか。中スタジオの形が細長い、これで合唱やバレエのリハーサルが充分できるのか。

スタジオ、ホール、それぞれの使い方が基本計画で示されているにも関わらず、達成されてない。それは、必ず是正していただかねばならない。今のままでは、事業を行うのにそもそもつまずきが生じる。

桧森分科会長

演劇などの場合は、実物大の仮の舞台装置を作って稽古しなければならない。そのために、舞台面と同じ広さが確保できねば困る。

井上委員

これまでに、子どもが中心のイベントに多く携わった。稽古では、舞台を使って練習できないので同じ広さの展示場を使ってかなりの期間練習をした。子どもは、「ここに袖があるからね」と説明しても無理なので、舞台面と同じ広さの場所で練習する必要がある。大ホールの舞台の幅が8間ならば最低8間は絶対必要である。本当は8間よりももっと幅が欲しい。7間では狭すぎる。

伊藤委員

大型の合唱大会を行う時には、リハーサル室でリハーサルした後に舞台上がるという動線を作る。この芸術文化創造センターでは、リハーサル室が大スタジオにあたるだろう。なので、大スタジオは大ホール舞台面と同じ広さがあり、ピアノが置かれ、出捌けの練習ができる必要がある。きちんと、舞台面と同じ広さを確保していただきたい。

桧森分科会長

大スタジオにも、本番と同じように山台を組んで練習できると良い。

井上委員

大スタジオの8間×8間が絶対に必要である。

桧森分科会長

大スタジオが、大ホール舞台面と同じ広さの8間×8間を確保すること。その点については、管理運営専門分科会から強く申し上げる。

井上委員

オーケストラピットについて。市民ワーキングでも、オーケストラピットがいる、いない、の議論があるが、総合舞台芸術を行うならばオーケストラピットは必ず必要となる。なぜいないという意見になるのかが信じられないくらいである。

オーケストラピットは、オペラ・バレエ上演のためだけでなく、前舞台に使うことも想定される。オーケストラピットとして使うよりは、舞台面までせり上げて前舞台として利用する方が多くなるだろう。

緞帳の前に舞台があるということは、緞帳の後ろで場面転換などの準備をしながら、前舞台で出演者が何かを観せるなど、使い勝手が良い。前舞台があると無いでは催しがガラッと変わる。オペラ・バレエの際には必ずオーケストラピットが必要となるし、貸館でも必ず必要である。舞台と同じ高さまで上げられれば便利に使える。

予算が無いから造れない、といったレベルの話ではなく、創造していくためには絶対に必要である。

桧森分科会長

オーケストラピットがない代わりに客席を取り外し、それをオーケストラピットとして使うようになっているホールもあるが、それはどうなのか。やはり、上がり下がりが出来た方が良いのか。

井上委員

上がり下がりできる必要がある。

伊藤委員

オペラ・バレエが頻繁に上演されるとは思わないので、それだけのためならば、桧森委員の仰るとおり客席の取り外しで良いと思う。

ただ、他の事にも使うならば、持ち上がる必要がある。音楽堂のオーケストラピットは電動でなく手動なので、オーケストラピットが28年間使用されなかった。それでは宝の持ち腐れである。また、手動だと使用するたびにバイトを雇うので人件費がかかる。張出し舞台にもなるよう、オーケストラピットが上がり下がりする機構があることにより、上演できるものの幅が広がる。第九などの大人数での合唱の際には張出し舞台は必ず必要となる。また、音響的に舞台を張り出したほうが良い催し、能や歌舞伎、ミュージカルなどの演出など、様々な場面で必要となってくる。建設コストは大事だが、造った方が色々なことが出来る。色々なことが出来るということが、小田原にホールを造る意味のひとつとなる。コストを節約したがために出来ないことが増えるくらいならば、その予算はきちんと捻出し、造らねばならない。

井上委員

今までやった事業のひとつで、ニューイヤーコンサートでは、オケが本舞台で演奏し、前舞台にてバレエやダンスをしたり、歌手が歌ったりしたことがある。

伊藤委員

そのように、前舞台があると様々な演出ができる。神奈川県民ホールもそのような形でニューイヤーコンサートを行っている。

桧森分科会長

オーチャードホールも同様の形状で行っている。

井上委員

また、例えば千人の交響曲をやるならば、前舞台が絶対必要となる。

伊藤委員

200名の合唱団に60名のオケだと、前舞台が必要である。やはり、オーケストラピットが無いというのは、このホールでは困ると思う。

井上委員

「芸術文化創造センター」としては、絶対に欠かせない、整備しなければいけない物である。また、電動式や油圧式で、即座に用意出来るものが必要である。音楽堂のオケピが使われないのは手動だからである。

伊藤委員

市民の方でも使える、便利な物にすれば使われるようになる。

桧森分科会長

管理運営分科会から、「オーケストラピットは絶対に必要。」と伝えていきたい。

三ツ山委員

ギャラリーが前基本設計案と全然変わった。

前の図面は、ギャラリーの搬入動線としてホールの搬入を使っていたので、それは無理だと指摘した。それが正面の隅にきているのは使い勝手として良い。

また、ギャラリー機能とアトリエ機能が混同されているかを感じる。ワークショップにも色々な解釈があると思うが、「子どもが絵の具だらけになって遊べる」というアトリエ機能と、ギャラリー機能は明確に分けるべきである。小さい子どもが絵具だらけになるのは絵としては楽しいが、そうしなくとも子どもが楽しめる企画はある。

2階にワークショップルームがあるが、そこで何をするのか。イメージの整理をしなければ機能にも反映できない。

また、ギャラリーの近くにある「子供ワークショップギャラリー」は搬入導線にもなるため、機材庫とすべきである。

桧森分科会長

機材庫に水場はいるか。

三ツ山委員

機材庫自体に水場を造るというよりは、裏のトイレや控室などの部分に水場があっても構わない。機材庫は、彫刻台、展示用のライト、ワイヤーフックなど、備品でいっぱいになるだろう。

ただし、ギャラリーの形状が真四角になったのは使いやすい。前の位置よりは、今の位置の方がよい。

伊藤委員

ギャラリーはどこから入るのか。

事務局

図面に書かれていないが、おそらく廊下側からではないか。

伊藤委員

基本計画時から、ギャラリーでパフォーマンスする可能性や、ギャラリーと大スタジオを連動して使用する可能性についても話されてきた。図面では連動性が読み取れない。常識的に考えれば、大スタジオの正面にあるのだろう、と解釈できるが、あっているのか。

大スタジオとギャラリーを連動するようなプロジェクトが出来るべきである。そのようなことを想定していただきたい。

桧森分科会長

大スタジオで気になっているのは、以前に三ツ山委員が、「大スタジオを臨時ギャラリーとして使用する場合、張り出していたら駄目」だと仰っていたが、ダンスの為のバーや鏡が付く可能性はないのか。それは中スタジオに設置されるのか。

伊藤委員

バーは組み立て式のイメージでいた。大スタジオは演劇空間など、何でも利用できる空間なので、空にならなければならない。仮に鏡があっても、隠せるようにしなければならない。

大スタジオは演劇が出来るように照明や、展示ができるような仕組みも必要だ、ということ言われていた。

小ホールが、固定席で鑑賞するような音楽や伝統芸能、演劇などの上演を想定しているのに対して、大スタジオは演劇・ダンスなどでの自由な舞台・客席構成が可能な空間として基本計画を答申したのだから、そうならなければならない。

井上委員

レクステンパーは組み立て式があるので、固定しなくてもよい。鏡も今はアルミのなどがあるので備え付けなくてもいい。何よりも、そこで色々な催しが出来ることが大事。さらにギャラリーの一部としても利用できるならば、広くなければならず、かつ余分なものが付いていてはならない。

伊藤委員

小ホールでは室内楽から伝統芸能まで様々な催しをすることを想定しているが、音響可変はきちんとできるか。大ホールの音響は標準的な質に担保されるだろう、と思っているが、小ホールの音響は残響可変ができることを前提に話してきたので、今一度ご確

認いたきたい。

桧森分科会長

動線計画についてはどうか。

井上委員

大ホールと小ホールの楽屋にどうやって入るのがわからない。貸館をするので、大ホールと小ホールは独立して動けなければならない。楽屋の入口が大ホール下手側にあるが、大ホールエリアを通らないと小ホール楽屋にいけないので、今の動線では成り立たない。

桧森分科会長

大ホールと小ホールの主催者が別というのにはあり得るので、楽屋口は完全にわかれてなければならない。また、小ホール楽屋と大ホール楽屋は、施錠したら行き来できないようにしなければならない。

井上委員

大きなコンクールなどの際には大ホール、小ホールを共有して使うこともあるが、その際に開放すればいいのであり、基本的にはそれぞれ独立しなければならない。

伊藤委員

楽屋口が今の場所だとすると、駐車場から遠いので、演奏者は楽器を持って楽屋入口まで歩かないといけない。チェロなどを持って雨の中徒歩で移動することになるのか。駐車場近くから中に入れることが必要である。本人が楽器を置きざりにして車を停めに行くということにはありえないので、このままでは車のポーターサービスをせざるを得ない。

また、小ホールのもぎり線はどこなのか。

桧森分科会長

一応ホワイエに入るところがもぎり線という想定をしているが、どう並ぶのか考える必要がある。

伊藤委員

楽屋側に2階に上がるエレベーターがないのが致命的である。出演者にも高齢の方、荷物の多い人など色々いるのに、どうするのか。

桧森分科会長

いざとなれば 2 階の中ホールやワークショップルームも楽屋として使われる可能性がある。その時の動線が裏の階段しかない。それ以外にも楽器などを運ぶことがある。

また、2 階の中スタジオが細長すぎる。6 間×5 間程度はないと、何のためにあるのかわからなくなる。

井上委員

2F に和室があるが基本計画では想定されていないが、何故あるのか。和室のエリアが広いので、特色となるであろう「創造」ということに関して、「創造スタッフ室」として部屋を造ったほうが良いのではないか。右側に創造スタッフ室という狭い部屋があるが、広い部屋で色々創っていける場、集まれる場として、桧森委員のいう「大人の部室」のような感じで、一番良い場所に置くことも大事かと思う。創造スタッフ室という小さな部屋は取り、ワークショップルームを広げれば 2 つそれなりの広さのワークショップルームができる。

伊藤委員

和室はいらぬ。井上委員と意見は異なるが、この場所が一番景色のいい場所となるだろう。その景色が良い場所がカフェとなれば、カフェだけの利用者がいるかもしれない。

また、「託児ルームにもなるような部屋」が景色のいい場所にあるのもいいかもしれない。創造スタッフ室は重要だが、作業を進めると散らかりがちである。それを、わざわざ外に見せる必要もないかと思う。現在想定している創造スタッフ室よりは広い必要があるので、それを広げれば良いだろう。普通に楽屋にもなる、ワークショップにも使える、託児にも使える部屋になれば良いと思う。

三ツ山委員

「市民ホール」から「芸術文化創造センター」という名称に変えたという意気込みが、設計図面から感じられない。ここを運営するスタッフや使用する人など、小田原の芸術文化を担い、実行する人々の動く場所や仕事をする場所だというイメージを、強く持たなければならない。そのような人たちが実質的な、ポスターづくり、チラシづくり、交流、情報発信などの作業がしやすくなければならない。「芸術文化創造センター」は「集約と発信」をする場所である。そのような意気込みを強く言っていかなければならない

桧森分科会長

その意気込みは、3 間×3 間の創造スタッフ室からは感じられない。

伊藤委員

創造スタッフ室は、今のままでは小さい。

井上委員

今のままでは、取って付けたかのように見える。

伊藤委員

本当は1階の事務所に近くにあり、事務室の人と連携しながら出来ると良い。今度、小田原駅東口に「おだわら市民活動サポートセンター」という施設が移転するそうなので、そちらを個々の団体の人が活動する場所とし、この創造スタッフ室は、このホールで市民主体のフェスティバルなどを行う際に、打ち合わせや実行委員会を行う場所として機能させなければならない。本当は、事務的には1階にあったほうがいい。無理ならば2階でも仕方ないが、もう少し中心にいるというイメージで、外からも人が出入りしているな、というのが感じられるのが良い。ただし、部屋の中が丸見えになってしまうと中で作業する人が辛いかと思う。

桧森分科会長

創造をするためには、作業をするスペースが必要となる。チラシの折込みなどの作業をするには、このスペースでは足りない。市民が芸術文化創造センターを支えることになるので、実行委員会が作業を行う、自主事業の企画制作を行う、レセプションの研修を行うなどの場所が創造スタッフ室なので、広さを含めてもっと充実させて頂きたい。

伊藤委員

チラシの挟み込みなどの具体的な作業を考えると、やはり1階が良い。また、お客さんの動線近い場所に当日のスタッフがいなければ不便である。折込みチラシも2階から1階に下ろさなければならないのか。働く人達の手間を、なるべく無くした方がいい。

桧森分科会長

場所としては和室を無くすしかないだろう。

井上委員

ここに和室を作る必要は無いし、和室はいらない。

伊藤委員

和室はいらない。

桧森分科会長

私も和室はいらないと思う。代わりに市民のフリースペースが大分減っているので、そうしたらどうかと思ったが、創造スタッフ室があまりにも狭いので、どこを選択すべきか。

伊藤委員

この図面は第2案なので、ここから良くなるだろうが、まだ図面にとってつけたようなところが感じられる。例えば、こんな小さなワークショップルームでどんなワークショップを行う想定なのか。

桧森分科会長

小さいワークショップルームは、この大きさならドラム練習などの部屋になるのではないか。

伊藤委員

あるいは倉庫だろう。このままだと中途半端な印象を受ける。

井上委員

または、和室の位置に応接室や貴賓室などはどうか。貴賓室とまではいかないかもしれないが、今後、立場が偉い方や外国のお客様が来るかもしれない。そうなると応接室が必要となる。それを景色のよい場所につくるのも、一案と思う。

伊藤委員

貴賓室はセキュリティとしては事務所の側に配置するのが安心だろう。

三ツ山委員

景色の一番良い場所は市民に開放しなければならない。

伊藤委員

私もそう思う。やはり、このホールに来たらお城を眺めたいと思うだろう。なので、小さいスペースで良いので、お城が見えて一般の人々が自由に出入りできる、写真が撮れるようにするのが、本来は良いと思う。

館長応接室などは必要だが、1階でいい。

井上委員

VIPへの接遇は、何かの折に求められる。

伊藤委員

VIP に対応できる部屋は必要だが、事務所に近くないと動向が見えない。

三ツ山委員

広報、宣伝のためには、看板やバナーなどを出さなければならない。建築家はそのようなものを嫌がる傾向にあるが、催しが市民に伝わるものが必要となる。

井上委員

市民会館の前に出ている看板よりも大きいサイズが必要となるだろう。

桧森分科会長

1 階のレストランの壁面、小ホールホワイエ壁面はガラスっぽいイメージを持っている。そこにバナーが降りてくることは想定していただかなければならない。

伊藤委員

ポスターケースなどについても、言っておかねばならないと思う。

三ツ山委員

スケール感のあるバナーが必要である。市民活動を行っている方々が、自分たちでポスターを作れるポスタープリンターが必要となる。どんどん作って、どんどん貼っていただきたい。

伊藤委員

ポスタープリンターは準備したい。

桧森分科会長

そういう物を含めて創造スタッフ室とならねばならない。

伊藤委員

創造スタッフ室を広くしていただきたい。中スタジオのサイズも再検討していただきたい。ワークショップルームが点在しているのも気になる。

桧森分科会長

2 階のワークショップルームにいくところにスロープと階段 3 段がある。スタジオと小スタジオの間もスロープになっている。なぜ平らにならないのか。重たいギターアンブなどを台車に乗せて、キャスターつきの物を転がせなければならない。

三ツ山委員

設計上必要な段差なのか、デザインの段差なのか。設計者は、段差などでリズムをつけたがることもあるが、どのような目的で書かれているのか。

桧森分科会長

デザインの段差ならば必要ない。重たい物を運ぶなど移動することは必ずあるので、想定していただきたい。

伊藤委員

ピアノをピアノ庫からロビーを持って行けるか。段差がないか。

三ツ山委員

1階は段差がない。

伊藤委員

2階は中スタジオにピアノが入った際に、ピアノ庫がない。また、ピアノを移動させる手段がない。2階のピアノが他の所で使えないのはもったいない。

桧森分科会長

場所がないならば、中スタジオ経由で出さざるを得ないが、機械室を詰めて、セミコン程度は置いておけるピアノ庫を造れないか。

伊藤委員

小スタジオに持っていくかはまだわからないが、移動はできるようにしておかなければ、一部屋でしか使えないのはもったいない。

桧森分科会長

男女トイレの面積が一緒なのはあり得ない。男子トイレを削り、女子トイレにした方が良い。公演の休憩時間に影響する。

井上委員

小ホールの舞台面が6間×5間なのは仕方ないのか。

伊藤委員

小スタジオもだが、取り急ぎ大スタジオと中スタジオを優先して何とかすべきだと思う。

事務局

現在、小ホールの楽屋は同じ規模の楽屋が3つ並んでいるがどうか。実施設計で詰めるのかもしれないが、考え方だけでも示していただきたい。

伊藤委員

大は小を兼ねることもあるが、小ホールにこれだけの楽屋が必要か。そのままとしても、中のインテリアによって、ソリストの部屋や大部屋に変えられることも必要だろう。

桧森分科会長

同じ大きさの部屋が3つあるので、1つは小部屋のようにしてもよい。

井上委員

区切れれば合唱団などの大人数でも区切って使える。

伊藤委員

どこまでやるかは考え次第だが、最近では、楽屋にピアノ置いてあったりする。指揮者やソリストは楽屋にピアノがあれば使うだろう。無くても近くにピアノが弾ける部屋があればフォローできる。

大ホールはオケが男女分かれて入れる部屋、ソリストの部屋、マエストロの部屋という分類が大雑把に考えられる。例えば60人のオケならば、30人、30人が入れる部屋と、出来ればコンマスの部屋、指揮者の部屋、ソリストの部屋。ソリストも例えば第九ならば男性と女性がいる。このように積み上げると数は出てくるだろう。

桧森分科会長

この点はこれから詰めていくところだろうが、管理運営分科会から頭出しはしておきたい。かつて私の経験で、マエストロが2人重なり、非常に大変だったことがある。

伊藤委員

そのような時のために、「なんにでもなる部屋」を造っておく。例えば、コンマスは大楽屋と一緒にいいが、もし狭くても一人に部屋になれる部屋があるとなお良い。

三ツ山委員

映画の映写、映画会はできるのか。

伊藤委員

ホリゾン幕で出来るのではないか。

井上委員

あるいは、スクリーンを買うか。ホリゾン幕でも出来ないことはないが反射率が違う。

伊藤委員

大会や講演会を行うためには、スクリーン、プロジェクターは必須である。それがあれば、映画会はできるだろう。

桧森分科会長

ホリゾンではなく、それよりも前に映写用のスクリーンを造ることになるだろう。

桧森分科会長

各部屋の使い方を想定し、設計案に意見を言ってきた。他にあれば事務局に連絡していただきたい。

2. 議題 (3) 市民参加について

桧森分科会長

市民参加について、事務局から説明をお願いする。

事務局

(説明)

桧森分科会長

これからの芸術文化創造センターを見据えると、自主事業の一部を市民が企画することになるだろう。市民の活動に補助金を出す、ということではなく、芸術文化創造センターが目的を達成するために行う事業の一つに、市民が自主事業を企画する、ということも含まれる。

神奈川県横浜市緑区のみどりアートパークのこけら落とし公演として、前年度に半年間の市民プロデューサー養成講座を行い、その受講者が実行委員会をつくり、コンサートを企画した。出演者の交渉や配券管理、構成、演出まで、すべてを自分たちで行った。プロのアドバイザーもついていたが、市民が企画したコンサートとしてはレベルの高いものができあがった。このような市民参加の方法も考えられると思う。

ワーキングの中では、「そのようなことは既に行っている」とのご意見もでたが、「ホ

ールの自主事業とは何か」がまだよくイメージできない方もいらっしゃると思う。

井上委員

市民の中には「劇場に関わりたい」という希望を持っている方はいるが、「実際に何ができるか」となると、「その中には居たいが、責任のある仕事をするのは少々腰が引ける」という様子が見受けられた。ものを創っていく、という意識づけをするには、緑区の様な事業を行ってみる価値があるが、責任を持ってやらねばならない。

桧森分科会長

緑区は、区が60万円を出したが、自分たちで40万以上の金額を企業から協賛金として集めた。公演の規模そのものが、自分たちが動くことで決まっていたために責任感が生じたのだと思う。

伊藤委員

どちらが先かという問題になるが、今、市民の意見を聞き設計を行っている。次に、設計が終わり施設が完成してからは建物が型となり、皆で使いこなしていくことになる。

小田原で現在も活動している方々がいらっしゃるが、今度は芸術文化創造センターの型の中で何をやるかを考えたうえで、市民参加の自主事業系の企画も立てていくことになる。例えば、小ホールや大スタジオを使いこなす企画を立てて行ってみることが考えられる

最終目標としては、フェスティバルにて自分たちの発表も行うが、グループを越えてひとつのものを創る、表現する、ということに長い目でみて到達できると良いと思う。そういうイベントが自主事業のひとつの柱になると良い。

まずは小ホール、大スタジオ、を使いこなすためのワークショップを重ねてイベントをひとつ創ってみるのが良いのではないかと。

また、自主事業のどこかを市民の団体に預ける。小さなことで良く、例えばレセプションニストを任せるとか、子ども向けコンサート時に同時開催される楽器体験コーナーなど、自分たちの技能を持って参加する、ということが考えられる。

市民企画については創造スタッフ室を利用する、ワークショップはワークショップルームで行う、など、施設を使いこなす方法のケーススタディを最初に行うのがいいのではないかと。

また、鑑賞者として支えること、まちで周りから支える、ということもあると思う。イベントがあるときは自分たちの手作りのものを売る、おもてなし隊が出るなど、そういう市民参加も出来るとまちとの関わりが出て良いかと思う。

桧森分科会長

ホールに関わる市民の数は限られるが、「小田原にとって良いことを芸術文化創造センターで行っている」と19万人の市民に思ってもらうためには、市民に広めてもらうしかない。市民同士の繋がりの中から、芸術文化創造センターの良さや役割が伝わっていく必要がある。

三ツ山委員

ボランティアに関しては古くから関心を持たれているシルバー世代と“サポーター”としてアートイベントに関わっている世代に分かれている。しかしながら、「参加したい」ということと「出来る」ということは別であると考えべきである。

例えば若い世代では「ホームページがつくれます」など、自分のスキルを持って協力してくれる人もいる。しかし、「役に立たないボランティアはいらない」という考えはあってはならない。

「これなら出来る」「これが出来るようになりたい」という、学びの場としてのボランティアを育てることが、パブリックの役目かと思う。

桧森分科会長

市がきちんとしたスタンスを持たず、公平に扱おうとすると、ボランティアがお客様になる。三ツ山委員が仰ったことを目指すには、市や運営者が「役だってもらおう」という考えを持たなければ難しい。

三ツ山委員

そのために、今ボランティアを対象にしたスクールが盛んになっている。意欲のある人に必ずしも経験や知識があるとは限らない。ボランティアも、やりたいという申し出を面談などをしながら断るということもあっていいと思う。それにめげずに、再度挑戦するという意欲が市民の活力となる。

文化の活動でこそ、車椅子を押す研修、白杖のサポートの研修などを行うべきである。役に立つことは困っている人を助けられることなので、そういう研修を実施していく。その中で、子どもの相手が得意、お年寄りサポートが得意、ネットワーク関係のスキルがあるなど、個々に出てくるのではないか。

伊藤委員

研修付きでスキル登録などをするといいかもしれない。以前のご意見に、「手話通訳や目の見えない方を客席までご案内するなどのサポートは市民でも出来る」といった意見があった。それを今のタイミングで具体化できると良い。

桧森分科会長

意欲がある方々に研修をすれば、かなりのことが出来る。「小田原文化コンシェルジュ」という意見も出ていた。

伊藤委員

例えば、渋谷のハチ公広場に置いてある緑の電車の中にはボランティアのコンシェルジュがおり、英語が話せる人が外国人に対応している。そのようなことが小田原であっても良いと思う。

桧森分科会長

市民参加について議論しているが、「スキル」という観点から整理し直す必要がある。市民の方が詳しい、ということも当然ある。例えば、小田原市の中にどのような文化資源があるか、については市民の方が詳しいのではないか。市民に教えてもらう、ということも多いに考えられる。

伊藤委員

貸館の際に、地域の人がチケット配券の相談窓口となり、チケットを置ける場所を教えてください、自らが窓口として売ってくれたりすれば非常に助かる。

三ツ山委員

ポスターを貼ってあげる、チラシを貼ってあげるという申し出が非常にありがたい。

伊藤委員

市民間での広報力や、市民が催しを観に行くという土壌があれば、「このホールに来て公演をしよう」と考えるプロモーターはいるのではないか。

三ツ山委員

そのようなモデルを作り出すのも運営する側に必要かもしれない。

井上委員

ワークショップを行い仕掛けて、「こんなことが出来る市民がいる」と見だし、一緒にやっていけると良い。

第4回の管理運営部会ワーキングにて、「約250ある自治会を使って、自治会単位で宣伝マンとなる文化委員を作ってチラシを回したらどうか」という意見があり、非常に面白いと思った。自主的に250程度もの自治会が芸術文化創造センターに協力してくれれば、凄い力になる。自分たちがやる、時には自分たちがお金も集める、となると非

常に面白い。仕掛けてみる必要があると思う。

伊藤委員

そのような仕組みが構築できれば、普通の友の会のシステムよりもユニークである。

2. 議題 (4) その他

事務局

今後日程の確認を申し上げる。(日程確認)

3. 閉会

松森分科会長

本日の議事については全て終了したので、これにて会議を閉じさせていただく。